

〈修士論文要旨〉

『万葉集』巻八の研究

— 一六二九—三〇番歌を中心に —

はじめに

『万葉集』巻八（以下、巻八）は現存する和歌集で初めて歌を季節分類し、更に各季節を雑歌と相聞歌に分類、収載している。中でも秋相聞部は巻八各季節相聞歌中最大の三〇首を数える。秋相聞部の特徴として、その後半部に大伴家持（以下、家持）と家持の従妹で、後に正妻となった大伴坂上大嬢（以下、大嬢）との間で交わされた歌が八首含まれている事にある。これは巻八の他の季節相聞歌での両者間で交わされた歌数と比較しても多い（〔春〕2/15、〔夏〕3/13、〔冬〕0/9）。

家持の初期作品群は多くの女性たちとの相聞歌が存在する。その中で大嬢との相聞歌数は他の女性のそれを大きく上回る。ただ、両者間の相聞往来は複雑な過程を経ている。つまり天平四〜五年頃、お互いに相聞を交わした後、数年の離絶期間（離絶数年）を経て、相聞往来を復活させている。

二人の相聞歌群の理解については「現実の反映」とする橋本達雄氏¹⁾

* 池田 貴之

に対して佐藤隆氏²⁾が郎女指導の下で家持、大嬢それぞれがお互いを対象した男歌、女歌を習作していた、としている。また「離絶数年」についても「離絶数年」の期間が実際に存在したとする「実在説」³⁾がある一方、男女の関係修復を題材として、恋愛教育も兼ねた「歌遊び」と考える「文学的擬似設定」説⁴⁾に分かれる。

上野誠氏⁵⁾は「歌表現から実際の関係を想定することは、鑑賞者の印象批評によるほかない、と考える。むしろ、研究において問題とすべきは、どういう意図と意趣を以って贈答歌が交わされ、そこにどのように表現上の妙があるのかということに尽きるのではなからうか（傍線部・筆者）」と、テキストに表れた表現や意図、意趣こそ問題とするべき、とされている。傾聴されるべき説であり、本論もこの趣旨に従い、論を進めて行きたい。

本論が扱う一六二九—三〇番歌（以下、当該歌）の作歌時期は巻八における歌の配列や当該歌前歌の左注、及び当該歌に続く歌の題詞などから相聞往来の復活後に当たる天平十二年秋以降から天平十五年頃と考えられる。この時期は藤原広嗣の乱や聖武天皇の東国巡幸、恭仁

京遷都など、政治的に慌しい状況であった。家持もまた、聖武天皇の内舍人として天皇の側に仕えて東国巡幸に参加、恭仁京で数年を過ごした事が『万葉集』の歌などにより確認できる。村瀬憲夫氏はこの時期の作品を「家持の相聞歌が成熟度を増してきた、内容的広がりを持ってきた」としているが、当該歌はこの「恭仁京時代」の始まりと言うべき時期の頃の作品なのである。

また当該歌は「相聞長歌」の形態をとっている。「相聞」の部立に配される長歌の例は当該歌を含めて三十六例見られる(問答歌を除く)が、作者判明歌は十五首に過ぎない。その中で家持は巻八に二組の長反歌、すなわち夏相聞の一五〇七〇九番歌及び当該歌を残している事は注目に値する。

よって本論では当該歌の分析を軸として、その中でどこかを癒す意味で用いられている「なぐ」、及び地名「高円」を取り上げ、その考察から当該歌を読み解きたい。

第一章 当該歌の評価

当該歌の特徴として諸注釈や先行研究は次の三点を挙げている。

- ① 相聞長歌・長歌を用いて、恋の悶々とした気持ちを述べている点
- ② 挽歌的手法・相聞歌でありながら、「挽歌的」要素が見られる点
- ③ 類句性・人麻呂「泣血哀慟歌」や憶良「哀世間難住歌」に発想や語句の影響を受けている(あるいは模倣している)点

しかしこのうち②において「挽歌的要素」が具体的に何を指すのか、また③において発想や語句が受けている影響は必ずしも明確ではなく、今一度見直していく必要がある。

そこで当該歌が影響を受けたとされる「泣血哀慟歌」(第一長歌、②〇二〇七)と「哀世間難住歌」(⑤〇八〇四)、および家持初期の挽歌である「又家持作歌」(③〇四六六)と当該歌との語句の共通性(類句性)について見たところ、「為むすべもなし」などの幾つかの語句の重なりが見られた。しかし、これらの共通性をもって当該歌の特徴とするのは早計である。その例として坂上郎女「怨恨歌」との比較を行ってみた。「怨恨歌」は「相聞長歌、挽歌的手法、類句性」の特徴を全て満たし、かつ「叙情性の乏しさ」(全註釈)を指摘される点でも共通している。その結果、先の「泣血哀慟歌」などと比較した時と、同様の傾向が見られる事を確認した。⁷⁾

以上の事から先に挙げた特徴の中で挽歌的手法や類句性については必ずしも成立しえない事が見える。

第二章 「なぐ」の諸相

当該歌では家持が達えない大嬢への思いから傷心した心を「なぐ」しようとした、と詠うものである。この「なぐ」は構図こそ「泣血哀慟歌」にも見られるが、その用法には大きな違いが見られる。「万葉集」中の「なぐ」の意味として第一に「海面などが」穏やかに静ま

る」の意であり、第二には第一からの派生で「心や恋が静まる、おさまる、やわらぐ、穏やかになる」との意であり、当該歌を含む多くの例で見られる。

これら「なく」の用例は「第三期まで」、「家持初期」、「越中赴任期」に分類する事が出来る。そして、「第三期まで」では「なく」は「(人)の」死や旅、恋」といった事象への慰めとして使われている。一方、「越中赴任期」には家持ほは一人が「妻の不在」など、日々の生活の中での要素を「なく」されたいと考えている事が見える。そしてある時期より家持が「なく」と詠う歌は『万葉集』からは一首も見られなくなる。それは「越中赴任期」の途中、大嬢が越中に下向する時期と合致する。偶然かもしれないが、或いは大嬢が家持の身近で生活する事で、家持は「なく」を求める歌を詠む必要性が無くなった、と考えられる。

当該歌の「なく」は先の分類から見ると、「家持初期」に属する。これは大嬢の「恋」を詠みながらも、「越中赴任期」にも通じる要素を持つ、過渡期と見てよいだろう。

第三章 高円へ

当該歌では、「高円」へ行く事で「なく」されるとの想定を読み取る事が出来る。家持がなぜ「なく」の場として高円を選んだのかは『万葉集』中の「高円」の用例からその一端を窺い知れる。

『万葉集』における「高円」の用例は二四例である。注目すべきはその多くで高円の自然が詠まれている事、そしてそれらのほとんど(十四例・当該歌含む)が当該歌と同じ秋を詠んだものである。また当該歌の「山にも野にも 打ちゆきて 遊びあるけど」などから当時、高円が狩などを行う「楽しい場所」として認知されていた事も分かる。そして大伴家の別宅が高円に近い「春日の里」にあった事も知られており、家持や大嬢たちにとって身近な場所であった事は十分考えられる。家持は当該歌に、大嬢にとっても身近であり日頃楽しい場であるはずの「高円」を寂しい風景として描くことで、家持の寂しさを強く詠みあげられているのがわかる。

おわりに

当該歌は諸注釈が指摘するような人麻呂や憶良の「模倣」だけでは無く、人麻呂や憶良に学びながらも、「なく」の語にみられたように、日常生活の「慰め」を求める発想を持ち込む「文芸意識」に基づき、作り上げようとした作品である、と考察した。

ただ当該歌の家持初期相聞歌における位置づけ、さらに家持と大嬢との歌群全体への考察を行う事は出来なかった。今後の検討課題としたい。

註

- (1) 「家持をめぐる女性たち」(「大伴家持作品論攷」一九七八 塙書房)
- (2) 「家持の疑似相聞世界」(「大伴家持作品研究」二〇〇〇 おうふう)
- (3) 実在説はさらにその原因をめぐり、次の様に分かれる。
・家持原因説
北山茂夫「天平貴族の青春と恋」(「大伴家持」一九七一 平凡社)
・大嬢原因説
伊藤博「万葉集の歌人と作品 下」一九七五 塙書房
川口常孝「大伴家持」一九七六 桜楓社
・その他
武田祐吉(「萬葉集全註釈」一九五八 角川書店)は「離別数年というの
はどういう事情であるかわからないが、幼時は共におり、年頃になるに及ん
で、住居を別にしたのでもあろうか(傍線部・筆者)」とし、鈴木武晴「坂
上大嬢との恋の歌」(「セミナー万葉の歌人と作品」第八巻 二〇〇二 和泉
書院)は、「坂上大嬢が天皇に貢上される氏女として宮廷に仕えることにな
ったのではないか(傍線部・筆者)」とそれぞれ述べられている。
- (4) 辰巳正明「離別数年、復会相聞往来」の意味について(國學院大學大
伴家持研究会編「大伴家持研究3」二〇〇一、④〇七二七「善利春子氏担
当」研究編)
- (5) 「小山田の苗代水の中淀にして『万葉集』卷四の七七六一紀女郎の意趣返
し」(森水道夫編「芸能と信仰の民族芸術」二〇〇三 和泉書院)
- (6) 「家持の相聞歌—恭仁京時代—」一九八八(「上代文学」六〇号)
- (7) 「怨恨歌」の類句性や挽歌的手法について、小野寺静子氏(「怨恨の歌—
大伴坂上郎女の志向する世界」『萬葉』七十九号 一九七二、のち「坂上郎
女と家持」二〇〇二 翰林書房 所収)は「怨恨歌が相聞歌に分類されるも

のであるにもかかわらず、挽歌にも通用されている詞句、対句を持つ」と指
摘している。だが挽歌性については「うつせみ」の語で青木生子氏(「万葉
集における「うつせ(そ)み」—挽歌から哀傷歌へ」『青木生子著作品集』第
四巻 一九九八 おうふう)が、また対句については「朝にく夕にく」の対
句で阿蘇瑞枝氏(「大伴家持の対句表現」『論集上代文学』第十五冊 一九八
六 笠間書院)が特定の詞句や対句を「挽歌的」、「相聞(歌)的」と言う事
は困難であると指摘している。

近年、大森亮尚氏(「坂上郎女の怨恨歌」『セミナー万葉の歌人と作品』第
十巻 二〇〇三 和泉書院)は「怨恨歌が「泣血哀慟歌」を本歌としてその
語句を用い、作品の影に自らの表現を重ねる事で表現の幅を広げる「再構成
の文芸」が行われた「本歌取り」の如き手法で作歌されている」としてい
る。

〔追記〕本論は平成十六年度美夫君志会万葉ゼミナールにおける発表を基礎と
して大幅に改めたものである。席上、諸先生方より貴重な御意見を賜った。
紙上にて謝意を示したい。